



Title	〔試訳〕 マリオ・デ・サ＝カルネイロ 「夢の男」
Author(s)	後藤, 恵
Citation	ブラジル研究. 2026, 20, p. 33-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106120
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔試訳〕

マリオ・デ・サ＝カルネイロ

「夢の男」

後藤 恵 訳

はじめに

本稿はポルトガルの作家、マリオ・デ・サ＝カルネイロ(Mário de Sá-Cameiro, 1890-1916)の短篇小説「夢の男」(“O Homem dos Sonhos”)の試訳である。

現在、サ＝カルネイロは、ポルトガルのモダニズムを代表する作家のひとりとみなされている。彼が詩人フェルナンド・ペソーア(Fernando Pessoa, 1888-1935)とともに中心的役割を果たした文芸誌『オルフェウ』(*Orpheu*)は、ヨーロッパの前衛主義をいち早く取り込んだ革新的な試みであった。その革新性ゆえ当時の保守的な文壇からは批判され、いわゆる「オルフェウ世代」といわれる彼らは生前十分な評価を得ることはなかった。しかし、ペソーアが国際的に評価されるようになり、親交が深かったサ＝カルネイロへの関心も高まった。パリに滞在していたサ＝カルネイロがリスボンのペソーアに宛てた書簡は、ポルトガルのモダニズムの形成過程を知るうえでの重要な資料として考えられている。

サ＝カルネイロはわずか25歳で自らその生涯を閉じたため、作品数は限られるものの、詩と短篇小説を中心に独自の作品世界を構築した。繰り返し語られるのは、自己同一性の破綻や主体の分裂といった主題である。また、彼の作品には象徴主義やデカダン派の影響が色濃くみられることも大きな特徴である。

短篇小説「夢の男」は、サ＝カルネイロがパリ滞在中に書かれたものである。1913年5月にポルトガルの文芸誌『アーギア』(*A Águia*)に発表され、同年6月15日にはリオ・デ・ジャネイロの新聞『ガゼッタ・デ・ノティシアス』(*Gazeta de Notícias*)にも掲載された。その後1915年に『燃える空』(*Céu em Fogo*)に収録された。

本作の中心的主題は、タイトルに象徴される通り「夢」である。『アーギア』に発表された際、末尾に「秋に出る『向こう側』(*Além*)という夢の本」という言葉が添えられた。これは当時サ＝カルネイロが出版を計画していた書籍名を指す。このことから彼が「夢」に強い関心を抱いていたかがわかる¹。

「夢の男」²

ジョゼ・パウリーノ・サ＝カルネイロへ

その男の名前を知ることはなかった。ロシア人だったと思うが確かではない。わたしが貧乏な医学生だったとき、パリのサン＝ミッシェル大通りにある油ぎった食堂シャルティエで知り合った。

毎晩夕食の席が一緒になり、ある日からふたりで話すようになった。

男は独創的でただならぬ精神の持ち主だった。奇抜な意見に、異質な考え。異質な言葉づかいに、突飛な身振り。わたしにとってあの男は謎だった。自分とは間違ってたなかったと後になってわかった。幸せな男だったのだ。わたし

は妄想に浸ってるんじゃない。何もその幸せを壊すことができないくらい、まったくもって幸せな男だったんだ。友人にも常々言ってる。自分の人生の最も奇怪な事実は幸せな男と知り合ったことなんだ、と。

ある雨の日、ひどく強く冷たい雨の日にその謎が解けた。わたしが人生にうんざりしていると、男はいつもとは違う調子で、わたしに同意した。

「まったくその通り！ この世はあまりにもむごい、すばらしくなったりやしない！ じゃあ、健康、金、名誉、愛、すべてをもってる奴はどうか。存在する美しいものすべてをもっているから、それ以上を望むことなんてできないんだ。この上ない幸せをつかんだわけだが、不幸でもある。欲しいものが何もないよりも不幸なことなんてないんだから！

言っておくが、不幸になるには多くは要らないんだ。つまるところ、人生なんてほぼなにもないし、大抵代わり映えないものなんだ…… どんなことでもそう。どうだ、生まれてこの方出されてきた食べものにもう飽きたんじゃないか？ 飽きる、そりゃそうだ。だけど、拒否はしなかっただろう？ 人間であり、人生を意のままに操るなんてできないんだから。最高の料理人を呼んだら、みなきみに野菜と肉を提供するだろう。5、6品は野菜で、もう5、6品は肉。この地球上にあるもので、動物でも植物でもないのは間違いなく鉱物なんだが…… これこそ自然界が理解しがたいほど貧しいことをよく示している！

感情はどうか？ 愛と憎しみ、最終的にこのどちらにも帰さないものを見つけてみてほしい。感覚は？ これもまたふたつ、喜びと痛みだ。この世ではすべてが性別のようにはっきりと対になっている。ところで、性別がふたつしかないことよりも悲しいことを知っていますか？

まあでも、目下のことに話を戻そう。教えてほしい、宗教でも芸術でも演劇でもスポーツでもない楽しみを。無理だろう、わたしが保証する。

間違いなく人生で最高なのは移動である。時間と同じ速さで進めば時間を忘れられるから。走行中の電車は瞬間をむさぼる機械なんだよ。だから、人間が発明した最も美しいものなんだ。

旅をするとは、移動を体験すること。だが、少し旅をすると、地に足をつけているときと同じ単調な感覚が襲ってきて、あくびしてしまいそうになる。辺り一面、同じ舞台に同じ小道具——山々、平原、海、草原、森。それに、同じ色——青、緑、セピア色。極地では目がくらむほどの白さが果てしなく広がり、単調さを究極に表現している。存在する以外の色や景色を知ることができなかったために、自殺した友人がいる。わたしが彼の立場でも、同じことをしただろう」

わたしはほほえみ、皮肉交じりに言った。

「でもあなたはそうしなかった……」

「ああ、だがわたしを誰だと思っているんだ？ わたしは違う色を知っているし、違う景色も知ってる。わたしは自分が望むものを知っているし、自分が望むものをもっているんだ！」

その奇怪な青い目からは閃光が放たれ、男はわたしに近づき叫んだ。

「わたしは他の奴らとは違う。わたしは幸せだ。よく理解しろ、わたしは幸せなんだ！」

男のあまりにも異常な態度とあまりにも独特な声のトーンから自分は狂人の話を聞いているんだと思い、一刻も早く会話を終わらせたかった。だが、口実は見つからなかった。わたしはそこにいなければならず、奇怪なその男はそこから一瞬も止まることなく、見事な告白をした。

「本当なんだ。わたしは幸せなんだ。自分の秘密を誰にも話さなかった。でも今日、どういうわけかきみに話したくなった。ああ！ わたしが月並みな人生を送っていると思っていました？……なんとも哀れな評価だ！ きみはわたしに一目置いてると思っていたのに！ もしそんな人生だったら、とっくに死んでいただろう。わたしの自尊心は屈することはないし、最大の屈辱はそういう人生を送ることなんだ。何度叫んでも飽きやしない。人間の人生など不可能なものなんだよ——多様性も独創性もない。レストランのメニューと一緒に。いつも同じ料理で見た目も味も同じ。

まあ、いい！ わたしは存在を変化させることができた！ だが、日常的

に変化させるんだ。わたしは存在するものすべてをもってるだけじゃない。わかるか？ 存在しないものもすべてもってるんだ。（それに、存在しないものこそ美しいんだ。）わたしは誰も生きたことがなかった時間を生きている。わたし自身がつくりだした時間、わたし自身がつくりだした感情、わたしだけの快樂を生きているんだ。そして旅をする。わたしのために存在する、はるか遠い国々や神秘的な国家を。わたしがそれらを発見したからではない。築いたからなんだ。わたしはすべてを築くのだ。いつの日か理想を打ち立てるだろう——理想を手に入れるのではない。その上。構築するんだよ。幻想的なその姿がわたしにもうかすかに見える…… 細長い…… 細長い…… 空高く消えていく…… 勝利を刻んだような……金色に輝いている…… いや、金というより黄金に輝く金属だ。

あとは、わかりきったことだ。存在しないすばらしいものを表現するための言葉がみつからないんだ…… ああ！ 理想…… 理想…… 今晚それを夢にみよう…… なぜなら、わたしがすべてを生きてるのは夢の中だから。わかるか？わたしは夢を操れるんだ。見たい夢を見るし、生きたいように生きるんだ。

わたしはすばらしい旅をした。いくつか話そう…… 最も恐ろしかったからこそ最も素晴らしかった旅の話を。

わたしは光にうんざりしていた。巡ったあらゆる国、みてきたすべての光景は、昼は太陽の、夜は星の光で満ち溢れていた。ああ！なんともいらだたしかった、いつまで経っても変わらない、わずらわしい光が。いつも、いつだって事物から神秘をうばっていた光がな……だから、旅に出たんだよ。未知の地に、現実を超えた世界に迷い込んだ地にね。そこでは、街や森が濃い闇に永遠に包まれている…… この奇妙な地域でわたしが経験した美しさは言葉では言い表せない。なぜならわたしは闇を見ていたから。きみの頭じゃよく理解できないだろうね、別にきみに限ったことではないが……

巨大な首都だった…… 大通りはどこまでも上に向かって伸びていて、両側には大きな木々が立ち並び、静かに歩き回る群衆で満ちあふれていた。乗り

物はというと、電車、巨大なバス、自転車が物悲しい音を立てながら規則的に動いていた。あの静けさすべては音楽に凝縮されていた。ああ！ 得体の知れない、甘美で新しく、恐ろしい震えが、わたしのなかを駆け抜け、わたしの身体は引き裂かれた！ ついに、わたしの目の前で、神秘的な生がひらかれたのだ、それは光で照らされていなかったもの！…… 壮大で恐ろしい光景！ わたしは闇を見ていた！…… わたしは闇を見ていたんだ！…… 迷い込んだ道の隅で恋人同士が唇を噛みあっているのをみつけた。ああ、漆黒の究極の闇のなかでのあの濃密なキスはどれほどすばらしかっただろう！…… さらに遠くには、血塗られた舞台が見えた。短剣が交わり、痛みの叫びが聞こえた…… それはわたしにとって最も身の毛のよだつ瞬間だった…… 郊外には、たわわに実るブドウ園、豊穡な小麦畑、穀物畑、風に揺れる果樹園が広がっていた…… 要するに、すべての生、あらゆる生命がその閉ざされた闇の中にあつたのだ…… なんとこの勝利！ なんとこの勝利だ！……

さらなる名誉はおそらく旅のなかで性別がたつたのふたつではない完璧な世界に到達したことだ…… わたしは見るができた。連続した、今まさに起きている絶頂の鎖のなかで、迷路のように絡み合った肉体が、互いを求めあい、広がる裂け目のなかで溶け合っていくのを。無限！ 無限！ 夜明けの光に包まれた肉体の賛歌であり、快樂の崇高な楽譜だった。渦のなかで揺れ動きながら、あらゆるその多様な性を震わせていたのは……。人生は波に揺れている…波に揺れるんだ！……」

「すべての旅をきみに話すのは不可能でしょう。だが、ほかの国についてももう少し話したい

なんと不思議な国だったことか…… すべてひとつの色だったんだが、きみに説明することはできない、なぜなら存在しない——色ではない色だったから。まさにそこに究極の美があつた。この世界の雰囲気、それを構成しているのは空気でもないし、他の気体でもない——大気ではなく、音楽だった。その国では音楽が息づいていたんだ。だが、それ以上に不思議だったのはそ

ここに住んでいた人間だった。地上の人間と同様、彼らには魂と肉体があった。だが、目に見えるもの、明瞭でリアルなもの、それは魂のほうだった。肉体はというと、目に見えず、未知で神秘的だった。わたしたちの魂が、目に見えず、未知で神秘的であるように。おそらく彼らの肉体は存在すらしないんだ、わたしたちの魂がおそらく存在しないように……。

ああ！ その国でわたしが抱いたのはなんとも神秘的な感覚だった！……わたしの精神は広がっていった…… 理解できないはずのものが理解できるんだと気づいたんだよ。いつの日かわたしは戻らなければならないだろう、比類なきその国、魂のその国に…

つまるところだね、友よ、わたしは自分のしたいように旅するんだ。わたしにはいつだって新しいパノラマが待ってる。山を望むのなら、スイスに行く必要はない。わたしは他の地域へと向かう。さらに高い山々がそびえ、氷河がいつそ光り輝いているようなところに。わたしには山々の景色が無限にあり、それらはすべて異なる。さらに、海ではない海、山でも平野でもない広大な大地もある。それらはもっと美しくて、もっと高くて、もっと平ら、つまり、もっと繊細なんだ！ わたしはこの世界を追い越した。つまりは宇宙。といっても、増大し続け、拡大し続ける宇宙。だから結局は宇宙じゃない。もっと別の何かなんだ」

「精神の領域においても、わたしには障壁というものはない。愛や憎しみを超えた、違う感情がわたしにはあるが、もちろんそれを定義することはできない。わたしだけのもので、言葉じゃ説明できないし、比喩を使っても不可能だから。わたしはそういう感情に心動かされるたったひとりの人間なんだ。だから、それを言い表す声など必要ない。誰にも伝わらないんだから。わたしが生きてきたなかで、最も美しい瞬間についても同じ。わたしが言えるのは、かろうじて現実に通ずるところがあり、まさにそれゆえに最も称賛に値しない瞬間についてだけ」

「さて、新たな快樂についていくつかざっと述べるとしよう」

「間違いなく女の身体はすばらしい——裸のまばゆい身体を手に入れることはほとんど超人的で夢のような喜びだ。ああ！ キスで濡れ、押しつぶされた褐色の乳房の神秘、大理石のようなエクスタシーのなかで肉体をかすめる黄金色の乳首…… 引き締まった鋭い脚——帝国の狂宴のかすかな震え…… 愛で傷つくために刻み込まれた唇…… 絶頂のときにきしみ、食いしばる歯…… そう、美しい。そのすべてがとても美しい！ だが残念なことに、その美しさを手に入れる方法なんてほぼない。身体はねじれ、もつれ、切望のキスが体中を覆う、血が流れるほどに…… 最後にはいつもふたつの性が愛し合い、混ざり合い、むさぼり合う——すべて絶頂で終わる。常に同じ器官に宿るから、常に同じなんだろう！……

さて！ わたしはこれまでに幾千のやり方で女をものにしてきたが、他の器官に宿る別の絶頂も経験した。

ああ！ 視線だけで所有するというのはなんと甘美なことか！ わたしたちの肉体は少しも裸の恋人の肉体に触れない。わたしたちの目、目だけが口に吸いつき乳房を嚙むのだ…… 焼けつくような川が静脈を流れ、わたしたちの神経はまるで堅琴の弦のように振動すると、髪の毛がそれを感じ、筋肉が緩む…… 遠くから見つめる目がすべての美を汲みつくし、ついには視界が広がるまでになる。わたしたちは全身で見て、身震いする。限りのない絶頂、影の絶頂が超越した切望のなかでわたしたちの肉体を分裂させる…… わたしたちは最高の享受に達する！ 視線だけで女の身体を手に入れるのだ。物理的にだが非物質的に。あたかも心で愛せるかのように。この場合、より甘く、より穏やかであるのに甘美さを失ってはいないんだ、わたしたちを深淵につき落とす絶頂は。

さらに別の快樂について、興味深いので簡単に触れておこう。女の身体を完全に手に入れるってのは、ひとつの乳房が押しつぶされる感覚として味うものなんだ。

つまり、友よ、わたしのことをわかってほしい。わたしは幸せな人間だ。

欲しいものすべてをもってるし、欲しいものを使い尽くすこともないだろうから。宇宙を無限のものにすることにわたしは成功した。みな宇宙は無限だというのが、それは狭く囲われた空間なんだよ」

長い沈黙があった。わたしの頭の中を台風が通過し、その見知らぬ男がわたしに呼び起こした幻想のイメージの渦が、現実に近いものになろうとしているようだった。だが、今に実を結びそうなそのとき、シャボン玉のように割れてしまった……

男は続けた。

「人生って常套句なんだよ。わたしはそれを避けることができた。それだけ」
そう言ってコニャックを頼んだ。

その後二日間その男とは会わなかった。レストランのテーブルで再会したとき、男の顔つきが変わっていることに気づいた。男は告白した。

「わたしはもう理想が何か知ったよ。物語の結末は思ってたよりも美しいものじゃないんだ……で、友よ、このところ何かしてたか？」

わたしたちはありふれた話をした。わたしは男の夢での人生に話題を向けたかったが、わたしの努力はすべて無駄に終わった

わたしたちは店を出た。男は家までわたしを見送り、おやすみと言った。

それから、わたしが男に会うことは二度となかった。

それから長い間、わたしはその奇妙な男のことを考え続けた。何か月も男の記憶が取りついて離れなかった。夢を操る男の秘密も享受したかったのに。だが、無駄だった。わたしは夢を操れなかったので、ほどなくして黄金のキマイラのこともあきらめた。

以後、わたしの狂気のすべては、その驚くべき謎にたとえかすかでも光を注ぐことに向けられた。

ついにある日、勝利の日に、わたしは真実に気づいた。あの男は何者だったのか？ 秘密！ 秘密だ！ わたしはずっと男のことを何も知らないでいた。よく一緒に家路についたが、男の家の場所をわたしが知ることはなかった。ロシア人に見えたが、男がそうだと言うことはなかった。

背はかなり高く痩せていた。髪は長く縮れ、悲しくおぼろげなブロンドで、幻想的な青い目は、いつの日かわたしを照らした目のなかで明らかに最も不思議なものだった。この支離滅裂ななかでその目だけを呼び起こすことができた。わたしにできるのは支離滅裂な表現でそれを呼び起こすだけ。まばゆい輝きだった——しかし輝いてはいなかった。

男の声は震え、息苦しく音を鳴り響かせていて、まるで体に存在しない偽りの喉から発せられているかのようなだった。立ち上がって歩きだしたとき、大腿で、軽やかで静かな足どりだったので、足が宙に浮き床についていないような気がどこでなくなった。彼の歩みはぼんやりとしていた——これこそ最も奇妙なことなのだが——外見にもまたぼんやりと霧がかかっていた。顔つきは定まっておらず、全体的に捉えるのはほぼ不可能だった。偉大な画家でさえ夢の男の不安定な顔をキャンバスに描きとめることは至難の業だっただろう。長い時間、目の前にしていても男をわかることはない。あのぼんやりとした顔は長い時間があっても覚えられない。

そして、その顔つき、歩き方、身振り手振り、声から次のような印象が浮かび上がった。その見知らぬ男は、もやがかった、ぼんやりした、あいまいで非現実的な存在だったのではないかと。夢の人物！ こうした考えが稲妻のように心を駆け抜けた。そう、男は夢に出てくる人たちと完全に同じ。翌朝、どれだけ努力してもその人たちを完全に再現することはわたしたちにはできない。緻密さに欠けるのだ。目を覚えていても口の感じを忘れていたり、変わった髪色だとわかっていても幻想的な目の色合いが抜けていたりする。要するに、夢のなかでかすかに見たおぼろげな人たちを総体的に再構築するのは不可能なのだ。彼らの顔つきはわたしたちをすり抜けていく。その奇妙な男の顔つきがすり抜けていくように。

結局のところ、その不思議な正体不明の男は夢の人物だった——だが、現実の人物でもあった。

得意げになり、遠く彼方の明晰さを呼び起こしたまさにそのとき、男の驚くべき秘密が脅迫観念としてわたしに襲い掛かってきた。自分が発狂してしまっているのではないかと怖くなった。最後に青い深淵のより深いところに飛び込むことができなかったなら、神秘の翼がかすめた自分の哀れな脳がどうなっていたかわからない。

もし夢の男が夢の人物でありながら同時に現実の存在でもあったなら、現実の人生を生きたはずだ。わたしたちの人生、わたしの人生、わたしたちすべての人生を？ ありえない。その忌まわしい存在に自分は耐えられないとあの男はわたしに告げたじゃないか。それに、存在に対する男の態度は夢の人物のまさにそれだった。そう、非現実的でおぼつかない人の、非現実的でおぼつかない姿の態度だった。したがって、その驚くべき見知らぬ男はわたしたちの人生を生きていなかったのだ。男はわたしたちの人生を生きていないのにも関わらずぼんやりと姿を現すのならば、それは、彼がわたしたちの人生を夢に見ているからなんだ。

こうして、わたしは無限というものの片鱗を目にした。不思議な男は生きることが夢みて、夢を生きていたのだ。わたしたちは実在するもののなかで生きている。美しいもの、それを夢みる力をもっているだけ。しかし、彼はそうではない。現実を征服し、夢のなかにそれを閉じ込めた。非現実を生きていたのだ。

キマイラの埃が舞い上がっていく……。

黄金の翼！ 黄金の翼！……。

1913年3月

パリにて

¹ Martins, Fernando Cabral. *O Modernismo em Mário de Sá-Carneiro*. Lisboa: Editorial Estampa, 1997, p.48. Martins はこれについて、題名にある「夢」は文学的な意味を獲得すると述べている。また、本作とペソア of 戯曲「船乗り」(O Marinheiro)との類似性を指摘している。

² 訳出にあたっては、“O Homem dos Sonhos” in *Verso e Prosa*. Edição de Fernando Cabral Martins. Lisboa: Assírio & Alvim, 2010, pp.477-487. を底本とした。また、Margaret Jull Costa による英訳も随時参照した。

参考文献

Martins, Fernando Cabral. *O Modernismo em Mário de Sá-Carneiro*. Lisboa: Editorial Estampa, 1997.

Sá-Carneiro, Mário de. “The man of dreams” in *The Great Shadow (and other stories)*. Translated by Margaret Jull Costa, Dedalus Limited, 1996, Kindle edition.

Sá-Carneiro, Mário de. “O homen dos sonhos” in *Verso e Prosa*. Edição de Fernando Cabral Martins. Lisboa: Assírio & Alvim, 2010.